虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です

Rainbow Over Bridge

（虹の架橋）

第３６４号
令和７年12月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
吉田シヅエさん
（桐生市相生町）

英語教諭を経て、群馬県教育委員会初の女性教育次長を務め、今秋、瑞宝双光章を受賞。足利屋のお得意様で、気さくなお茶飲み友だちでもあります。

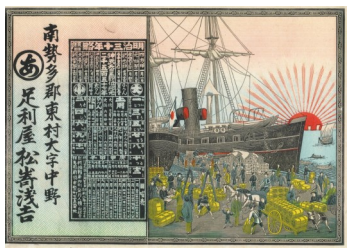
小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）《364》

あきない広告「引札」からみた大間々 足利屋の休憩コーナーでも「引札展」

大間々博物館「コノドント館」では、十二月十四日まで「引札」展が開かれています。「引札」（ひきふだ）とは、江戸時代から昭和初期にかけて商店が配布した宣伝広告のことです。引札の名前には、「客を引く」「目を引く」などの意味が込められており、一年の暦などを刷り込んで正月の前にお得意様に配ったチラシのルーツともいわれるものです。その当時、大間々は、足尾の銅を運ぶ「銅（あかがね）街道」の宿場町として栄え、足尾銅山への生活物資の供給基地として繁栄していました。今回の企画展では、岡商店や奥村酒造、「世界一」の酒の醸造元・澤與八郎商店や足利屋などの他、いろいろな業種の引札が多数展示されております。

コノドント館の引札展に合わせて、足利屋の休憩コーナーでも、「足利屋だけの引札展」を開催しています。（十二月十四日まで）

足利屋は、明治中期に足利の住人・松﨑浅吉が東村中野（現みどり市東町）で商売を始めたのがルーツです。浅吉の三男・松﨑友次は、足尾鉄道大間々駅が開業したばかりの大正二年に駅前の停車場通り足袋屋を始めて今年百十二年を迎えました。「足利屋だけの引札展」では、百二十八年前に松﨑浅吉が配った引札から、大正・昭和初期に松崎友次が配った引札など、計八点を展示いたします。



大間々に5つの劇場・芝居小屋

活動写真弁士（活弁士）は、昭和初期の全盛期には全国各地に８０００人もいたそうですが現在、活弁士として活動しているのは１５人ほどだそうです。その中の女性弁士・佐々木亜希子さんは「虹の架橋」の愛読者の一人で、数年前に虹の架橋の題字を書いていただいたこともありました。佐々木さんは、『３６５日の日本道』という本の中で「映画の草創期、活動写真と呼ばれた無声映画は、日本では弁士がライブで語りやセリフをつけ、賑やかに鑑賞されていました。欧米は音楽だけで、「活弁」は、浄瑠璃や歌舞伎、幻燈、写し絵、琵琶語りなど語りの文化が根付いていた日本だからこそ発達した独特の話芸文化です。現代の弁士は、無声映画時代の作品を当時と同じようにライブで説明するエンターテイナーであるとともに、「活弁」という文化や映像に遺された「時代」を伝える担い手でもあります。日本特有の映画×和芸文化を伝え、生かし、更に多くの方に喜んでもらえるよう展開して参ります」と書いています。

明治後半から昭和初期にかけて大間々の３丁目に共楽館、４丁目には電気館、５丁目には新聲座、６丁目に大間々座などの芝居小屋があり、活動写真や新派劇、狂言、浪花節などが上演されました。新聲座は明治２８年３月に建てられた大間々で最初の芝居小屋で建坪４００坪、観客１３００人以上が入る半洋装の大きな劇場でした。新聲座で上映する無声映画には専属の活弁士がいて、５丁目に住んでいました。

「共楽館」は３丁目の有志が株式会社組織の演芸場建設を計画し、足尾鉄道が開業する直前の明治４４年に開館し、看板はコノドント館に保存されています。

昭和１２年（１９３７）に建てられた芝居小屋・ながめ余興場で先月、全国芝居小屋会議が開催されました。芝居小屋は、時代の流れに押し流されて次々と姿を消し、今では全国で１６ヵ所だけになってしまいましたが地域文化を伝える施設として利活用して参ります。

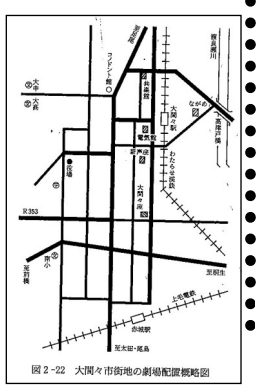


図２-22　大間々市街地の劇場配置概略図

世界一小さな 足利屋 トイレ美術館

足利屋とアスクでは毎年、前橋市在住の水彩画家・筑井孝子さんが描いたカレンダーをご希望の方に差上げています。２０２６年のふるさと群馬カレンダーのテーマは『道の駅』。表紙には「富弘美術館」の風景が描かれています。群馬県内にも川場田園プラザ、こもち、霊山たけやま、まえばし赤城、中山盆地、たくみの里などの有名な「道の駅」があり、カレンダーには、道の駅の位置や名物が添えられています。富弘美術館は十二月一日から改修工事のため休館となり、近くの童謡ふるさと館で「臨時富弘美術館」として富弘作品を展示いたします。

今月の絵《364》
筑井孝子さん『富弘美術館』

靖ちゃん日記

令和７年11月13日（木）

今日は46回目の結婚記念日。あの日に引出物で配ったクリスタルガラスの置時計は、少しだけ遅れ気味になってはいるが今でも動いている。結婚して、恭子と彰人を授かった。恭子夫婦は裏に家を建てて、足利屋を継ぎ、彰人は、3か月前に、西荻窪の駅の近くで「ロリンガ」という名前のバーを始めた。ヴィンテージスピーカーと真空管のアンプでアナログレコードを聴きながらカクテルが楽しめるふさなレコードバー。店を始める前に我家の屋敷稲荷の砂を持ち帰り、改装中の壁に塗り込んだり、祖父や父が写っている百年前の足利屋の写真も置いてあって、先祖への感謝が感じられた。46年前、仲人親の星野精助さんから「家庭の平和をくしてを事業の発展なし」という色紙をもらった。家庭の平和は、「亭主元気で留守がいい」。普段は、放し飼いの犬のように、首輪も指輪もつけずに飛び回っているが、帰るところは女房の掌の上。而乎の掌に掬（救）われている。

小春日や無事胃カメラの帰り道

先日、近所の医院で二週続けて胃カメラと大腸の検査を受けました。どちらの検査もイヤで、出来ればやりたくないと思っていましたが、子供の頃からお世話になっている医院に若先生が入り、検査の設備などが整ったとのことで思い切って受けることにしました。内視鏡の検査中は、看護師さんが背中をさすってくれ、若先生からは、丁寧な説明を受けて心配が吹き飛びました。晩秋から初冬にかけての暖かく穏やかな天気を「小春日和」と言うそうですが、帰り道は心も体も小春日和でした。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百六十五号は令和八年一月一日（木）発行予定です。